

論題	摘み田と田植
著者	和田正洲
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告 第2号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1969年(昭和44年)3月
判型	JIS-B5(182mm × 257mm)

摘み田と田植

The Customs of Rice Planting

和田 正 洲

Masakuni Wada

1

神奈川県における水稲直播栽培すなわちツミ田の例はこれまであまり報告されていなかった。また全国的にも直播の例は少ないのである。年中行事や農耕儀礼の根本は稲成育の過程の上に展開しているとはいえ、それは苗代から苗を本田へ移植する田植農法による稲作文化であった。

稲が日本へ移入されたとき、その農法が直播であったか田植であったか諸説がある。木下忠氏は「田植と直播」の中で、これらの諸説を詳しく紹介し批判された上で、これまでの伊豆山木遺跡や登呂遺跡の大足出土例から、弥生時代後期の稲栽培法は田植であるとされた。これは大足の現行使用法や文献から、大足が苗代に緑肥を踏み込むための用具であると断定されたからである。

宮本常一氏は直播先行説をとっておられるが、最近「畑作における技術試論⁽²⁾」の中で、埼玉県大宮地方から群馬県南部へかけて行なわれている直播の方法が麦の点播と似ていること、水田における直播は男がしており、一般に種をまくのは女であるが、直播から田植へ移行したところでは、田植を行なうのは女より男が多いとして、焼畑→定畑→水稲直播→田植という発展過程を暗示しておられる。

そこで本稿は水稲直播が田植に先行する農法であるか否かは別にして、現在知り得た水稲直播の実際例を記し、女田植と男田植の分布、直播の分布を分布図（本稿末尾）によって示し、二、三の農耕儀礼に触れて参考に供したい。なお目下調査中であるから中間報告としたい。

2

直播栽培の田を県下では一般にツミ田とよび、苗代から苗を移植する田を植え田とよんでいる。「分類農村語彙」によると静岡県浜名湖周辺や幡豆郡ではショヅミ、鹿児島県肝属郡では、ミウエ、タックイというところがある。県内ではツミ田以外の呼称は聞いていない。

なお直播栽培は終戦前後から労力節約の農法として見直され、新しい方法が専門家の間で研究され、そのための農具も考案された。その方法の項目を記すと⁽³⁾

1. 裸地乾田直播栽培⁽⁴⁾

2. 麦間直播栽培

3. 湛水直播栽培

以上の中で3は移植の場合と同様施肥をし代かきをしてから種もみをまき灌水するので在来の直播法にとり入れやすいようである。「稲作技術指導要領」によると、これらの地帯は立地条件により高能率の機械が実用化されていないため、乾田直播ほど省力化が行なわれず、田植作業が種まき作業に代わったものになりやすいとしている。調査に当っては、伝承者が農業指導員によって啓発された農法をどの段階で用いているか見極めねばならなかった。ただ本県の場合直播栽培の試験を始めたのが、昭和35年からで、37年に実用化される段階になったというから、その影響はなさそうである。

以下各地の事例を示す。⁽⁶⁾ツミ田の播種は4月下旬から5月上旬である。筆者の聞いた範囲では5月初旬が多い。

1 川崎市柿生町黒川⁽⁷⁾ この辺ではツミ田と植え田と半々であった。ツミ田は1斗入のツミ桶にツクテと種をまぜて入れ、それを首にかけて五つ株なら五つ株つんで後へ下がった。ドブ田なので田の中に渡り木が組んであり、その上に乗って作業をした。このときはノロバンテンにコシマキ（ふんどしの意）の姿であった。植え田の草取（2回）のころツミ田の草取もした。半日かかって草取をしても田のクロにつかぬことがあった。植え田と違って田をあまり干さない。花かけ水もしない。ツミ田はこれだけ苦労しても反当り4俵くらいの収穫しかなかった。

2 川崎市宮崎町土橋⁽⁸⁾ この辺は大部分がツミ田であった。ドブなので腰までつかり、竹を沈ませた渡り木を伝って仕事をした。ツミ田は種と堆肥をまぜて2斗入のコイザルに入れ、首にかけて種をつんだ。そのころはヒビオシといって田の上のごみを集めて歩き、その後を男がエブリで地ならしをしてつんだ。1番除草のとき多く出すぎた稲を除き株を作った。少なすぎるものは多い株から取って植えてやった。刈り入れは11月初めから11月20日ごろまで。麦まき後刈り入れ、ドブの稲刈りはカッチキを用い、1把丸めてはそれにのせてクロまで運んだ。昔はカケボシをしなかったので、稲束をクロに積むと、すぐそこでこいだ。落穂は拾ってクルリで叩いた。

3 横浜市港北区池辺⁽⁹⁾ ツミ田はヤト田で行なった。雀が種をつつくので狭い田でないといけない。もみまきは苗代田より半月遅れた。麦をまくようにツミ桶に灰と堆肥と種をまぜて田へ落とす。田には5尺の丸太か板に7寸間隔に縄を大きく結び、それを引きずりながら下がると溝ができる。そこへ種を落としていく。もみは10粒くらいで、反当り6升のもみを使う。水が冷える田は余計に落とす。1番草のとき間引いて株を作る。ツミ田は遅く植えても伸びるので、縄にするによいわらがとれる。

4 横浜市戸塚区阿久和⁽¹⁰⁾ (イ)種を灰ツクテに混ぜ手で古い苗を押し込んでつんだ。空になったツミ桶にはクロにいる人が入れてやった。ツミ田は荒れるので草が目立たぬうちにつんだ。9月1日ごろが穂の出はじめて、そのころまでに穂がきれいに出不いと収穫が悪い。昔は苗を植えるのを知らなかった。話者の叔母が横浜の根岸の村長の家に嫁に行き出戻りとなっていた。その人が根岸の田植を憶えており、その人から教わった。

(ロ) この辺はさつまや麦が主であった。田が少ないので善部ヤト、榛谷ヤトに田を作

りに行った。フカンボ（深い田）は渡り木を組んでそれを伝った。ツミ田の草取は大変だった。稲がめだつとヒエと一緒に育つので、どれが稲かわからなくなった。シロカキは種をまく前に終えねばならない。ツミ田はどの田もシロカキをせねばならなかった。植え田はナエマの苗が育つまでに本田のシロカキをすればよい。田うないをして1番ジロ（4月上旬）、2番ジロ（4月下旬）と2回シロキリをして、田を1枚1枚きれいにならしえた。これはヤッパという板に歯を刻んだものでならした。まいて25日くらいで1番草になり、草の実をこぼさぬようにするには3回草取をせねばならぬが、大てい2番草までであった。花かけ水は3番草のころ（盆前）水を干してからかけた。水をいったん張り草を取りまた干した。この辺はツミ田でも水がなくなった。それで夜寝ずに田回りをして水をひいた。水ひきは各自勝手だったので命がけてであった。稲刈りのころ霜が降った。カケボシにするのでないから一霜か二霜降ると稲束が軽くなってよいといった。稲刈りにはウシ（前出カッチキと同じ）にハナヅナをつけ、それを引きながら稲を刈り束をのせた。沢山水があるところはトライにのせた。稲束は水を含んで重いので、男は2把くらい女は1把をのせて運んだ。ぐずぐずできないのでカケボシの5把くらいのとき、畑に運んではセンバでこいだ。これをノコギといい、その場で脱穀した。

5 寒川町小谷⁽¹¹⁾ 堆肥、灰、種をまぜてつむ。全体の量として1反で6荷（90貫～100貫）。種は1反に6升。苗代は4升ですむ。ツミ田はドブッ田なので水はきれない。8反のうち2反をツミ田にした。1番草のとき株直しをする。蚕、麦、菜種が一緒になって忙しかった。話者（85歳）が嫁にきたころ夫がツミ田をやめた。

6 藤沢市高倉⁽¹²⁾ 5軒で組合を作り組から1戸ずつ出て肥料をこしらえ、ツクテに種を混ぜてツミ桶に入れて下げ、5人で5株ずつつんで下がる。ツミ桶が重いのでザルにしたが、こわれるのでサワラの桶にした。ツミ田が終るとツミ田の祝いをした。近所の子供をよび小豆の入ったおかずにお小豆御飯をして食べた。植え田、ツミ田両方行なった。話者27歳のころ（明治20年生）ツミ田がなくなった。

7 津久井町鳥屋⁽¹³⁾ 明治35年ごろツミ田をした。4月末にはつんだ。水田より4～5回余分に田回りをせねばならなかった。堆肥は粉末に近いようにして種と混ぜ、6株ずつ後退してつんだ。田の深さは膝までもぐるくらいであった。そのころのことゆえ、縄もひかずにつんだ。湧水の地なので1日1回は田回りをした。収穫のときソダを束にして結んだものに稲をのせクロに運んだ。収穫はツミ田の方が多く、品種は十七コボレだったかと思う。

8 相模原市田名⁽¹⁴⁾ 5月15日ごろ整地、柔らかいところの稲は踏み込んでしまい、うなって大足で歩き平らにする。さらにそこをスキ鍬でならす。その上に去年の夏、干してしまっておいたカリ豆を並べ、また大足で踏んで泥をしみ出させる。灰と下肥えとを練ったものを、1升まきなら種を1升入れて、フリコミ（オタマ杓子）ですくい鼻の高さに持って行ってフル。ツミ桶は肩からかけ、大足の綱は持たないので腰に縛って、フリながら前進する。1斗まき1反といった。株間1尺、作間尺2寸間隔。大足の中が尺2寸なのでその中でつんでいく。大足の右にまいて、クロで回転して大足の、前の左足の処へまく。よく考えたものである。1番除草のときムシリワケといって、いらぬ稲はふみ込んでおく。

あとは手でかき回すだけで草はとれた。このときは大足ははかない(乾いている)。収穫は11月。田は腰まで入った。水の中に入ってひどい目にあった。刈った稲はイナオキといって粟ガラで三角形の筏を作り、束を丸めてのせた。田植が始まったのは明治15~16年ごろで田植は田のよいとこでもしなかった。品種はゴンゲン堂、ヒエシラズ(冷えても穂を出す)。種はよい穂を見て別にしておく。まい種はよその村のよい種と交換してふやした。年よりから稲の種は地のよいところのを取って来い。寒いとこのはあまりよくないといわれた(此処は灰と下肥えだけであることに注意)。

9 相模原市下溝⁽¹⁵⁾ 大正初年までやった。堆肥はこまかくし、木灰(イロリの灰)を練って種と混ぜツミ桶⁽¹⁵⁾に入れる。5月初旬播取。田は深く胸までくるので渡り木が入っていた。肥料は木灰が大部分であった。植え田はなかった。

以上の外にツミ田の地は次の通りである。

川崎市片平、栗木、五カ田、古沢、平、横浜市港北区星谷、東方、川和、恩田、神奈川区羽沢、戸塚区宮沢、汲沢、相模原市上溝⁽¹⁷⁾、藤沢市遠藤⁽¹⁷⁾が現在判明している⁽¹⁸⁾。また農法として事例3、8の系統と、その他の事例の系統とがある。事例3、8はツムというより、マク方である。羽沢では播種後、芽生えた稲を調整することをツムという。

横浜、川崎のツミ田地帯はヤトの地で一般にヤト田といわれ湿田である。またその他の地もドブツ田、フケツ田、ウタリ田といわれる湿田である。相模川流域は現在でこそ灌漑施設が完備し良田となっているが、昔は湿田地帯で、湧水のため胸まで入る田があったという。

分布図では平塚市はツミ田がまだ発見されていない。こども花水川がかっては氾濫していたところで深い田があった。

男が田植をする地域は秦野、大磯を結ぶ線以东にあり、ツミ田はその範囲に分布している。

女が田植をするのは、山北、松田、西秦野、小田原市曾比、曾我、中郡町を結ぶ線以南にある。そして遙かに飛んで港北区川向町、中山橋町、横須賀市子安⁽²²⁾に女の田植がある。

女が田植をする地域では、深い田でもツミ田がなく(これまでの調査では)、場合によってはそこは男が田植をするところもある。

苗取りは男の田植地帯でも女がする。苗取りが女であることは、分業にしたままで深い意味はないかも知れない。

男の田植地帯は、田植を神事とするような感覚が稀薄である。それに対して女の田植地帯は昭和37年の緊急民俗調査のときでさえ、次のような報告がある。少し詳しく記す。

足柄下郡箱根町仙石原では、種オロシは酉の日にし、種まきは戸主がするものだ。焼米は田の水口に供える。田植後苗3把をカマド荒神に供え、その前で早乙女が田植歌をうたう。「農女に秋男」といって田植の早乙女としてカスリに赤いタスキ、手拭いをかぶり女はシャレル。男は稲刈りのニワ仕事にシャレル。収穫後の新米はカマド荒神に供える。

早乙女が田植のとき装うハレの日の意識を持つことは港北区川向町でも同じであった。これは田植を神事として考えた古い精神的伝承が残っているのである。それに対してこの感覚の欠如は男の田植地帯の共通した現象であるように思う。

また仙石原や山北では田植のユイ仕事で手が不足するときは、御殿場から早乙女を招いたという。ところが中津川流域ではウエタシ（植田師？）をよび、それは男であった。すなわち男の田植地帯では、田植の主流は男であることになる。

次に農耕儀礼は忘却があり、家によっても濃淡の差があるが、細部にわたって検討をすると女の田植地帯とは異なった要素が出るように思う。ツミ田および男の田植地帯の農耕儀礼を、焼米、苗を3把カマドに上げること（仮に中津の用語で荒神苗とよぶ）、刈り上げに絞って記すことにする。これらの行事は直接稲に関係しているからである。

〈焼米〉これは県下に広く分布している伝承で、苗代にまいた種の残りを大豆と一緒にいって紙に包み田の水口などに供える行事である。中津ではからすの餌といっって紙に包み田のクロに供える。ところが川崎市黒川、土橋（事例1、2の家）では焼米を作らない。鳥屋（事例7）では大豆をいって炊いた飯と混ぜたものをホーソー神に供え、それを焼米という。半原も同じである。田名（事例8）も同様で、ツミ田の残りの種をふやかし、干したものを豆と一緒にいり、⁽²⁴⁾ 梶でこすってモミを除いたものをふかし直して、ホーソー神にあげる。

〈荒神苗〉ツミ田をした家ではほとんどやらぬ。また県下の調査では男の田植地帯でもあまりない。阿久和（事例4）では植え田のとき苗3把を取り干して荒神に供えた。根岸から田植を習ったのが事実とすれば、田植農法の移入とともに儀礼も入ったのであろう。鳥屋の事例7の家はしないが、隣の田植の家で行なう。津久井郡藤野町名倉では田を持っている家でエビス様に供える。こども畑作地帯である。城山町葉山島も水田は僅か10人に1人が荒神苗をするかしないかという程度である。愛川町中津は荒神苗といっって供える。大磯町小磯は大ガマに供える。三浦半島は複雑であり三浦市三戸では苗の神といっって2把を膳にのせ強飯を供え勝手におく。同毘沙門では苗1把をオカマサマに供え、植えじまいにナエマに赤飯をあげる。横須賀市佐原は2把を供える。

〈刈り上げ〉刈り上げの祝いにボタモチを作るところが多い。川崎市黒川（事例1）では最後の1把を「カカシ様へ上げる」といっってエビス様に供える。相模原市田名ではカカシアゲはないが、直播後、雀が種をつつかぬよう竹筒の中央を削って曲げ、酒を注ぎカカシに吊し幣束を立て、その前で酒を飲む。おれの代わりに守ってくれとカカシにいう。阿久和はホカケが粟と陸稲の行事となっている。

3

以上のようにみてくると、直播地帯に田植農法が入っても、荒神苗が行なわれないことは当然であり、田名や阿久和のように明らかに直播から田植へ移ったところがあるので、他の男の田植地帯も直播から移行したものとすれば、荒神苗が聞かれないもの当り前であるといえよう。稲の初穂の行事であるホカケが特に粟や陸稲の行事（阿久和）となっているのは、畑作儀礼として粟のホカケが先行し陸稲へも用いられたのかも知れない。いずれにせよ、稲作は生産の主流ではなかったのである。焼米がホーソー神の供え物となっているのも畑作地帯の特徴である。鳥屋の場合などはあるいは水田耕作の儀礼をホーソー神に用いたことが考えられる。畑作地帯の中に水田しかも植え田の耕作者が僅かでもいるので

ある。

田の神の名称も県下ではあまり聞かれないのは、ただ山の神が田の神の性格を持っているという理由⁽²⁵⁾だけではないであろう。それはやはり生産様式の反映を示しているのではないかと思う。田名のカカシの例は一種の田の神祭であるが田の神をいわない。

田の神について「俚謡集」の田植歌をみると、田主、太郎次が出てくる。これが田の精霊⁽²⁶⁾だとすれば田の神観念⁽²⁷⁾があってもよさそうであるが、それが乏しいのは問題である。また所収の横浜市、橘樹、久良岐、都筑、三浦、鎌倉、高座、中、足柄下の各郡いずれも早乙女が出ていない。「東石見田唄集」の序文に柳田国男氏は「正条植の新作業は勢い早乙女⁽²⁸⁾の歌を必要にしなくなり又不可能にした⁽²⁹⁾」と述べておられる。下郡以外は男の田植地帯なので早乙女が入る余地がなかったのである。

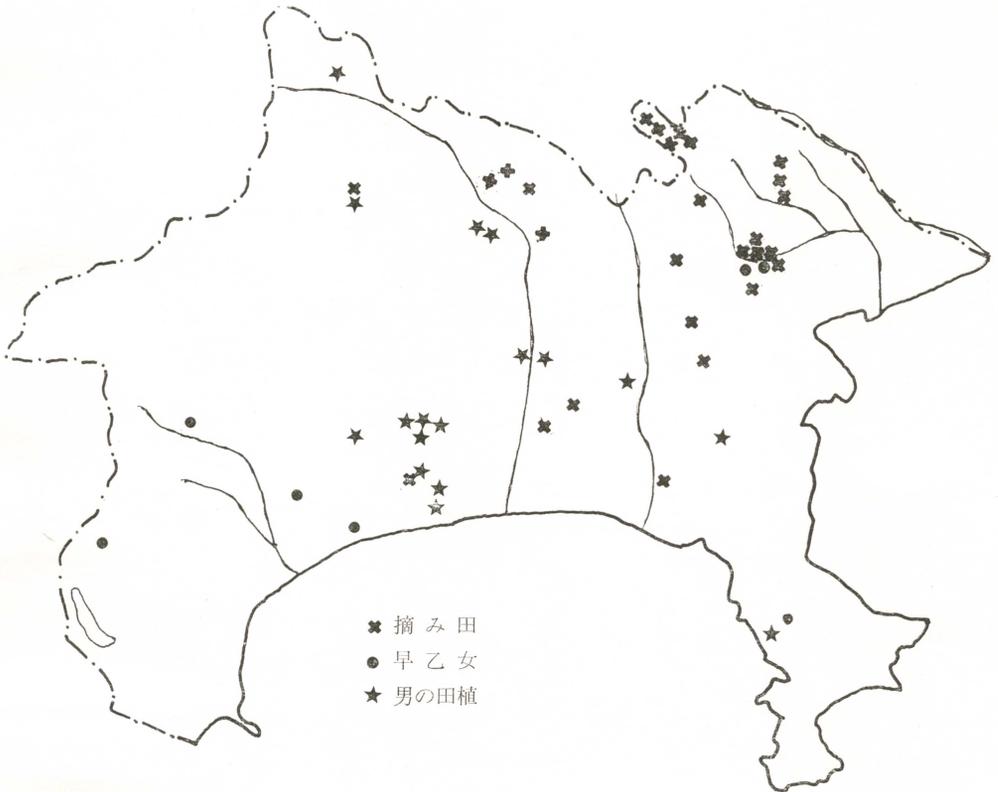
以上これまでの調査から男の田植地帯は直播から田植へ移行したのではないかと思う。播取に灰が肥料に用いられるのは苗代も同じであるが、津久井の焼畑地帯やその周辺の間は、灰の問題も考えねばならぬ。甲州道志は宮田に人糞を使わぬ。県下の宮田は不明であるが、灰と緑肥だけの肥料が宮田に用いられたかも知れない（事例8参考）。また田植農法が圧倒的に多い日本では、大足と直播との数多い資料は得られぬであろう。

おわりに宮本常一、木下忠両氏、県立農業試験場大川昌男、農林省上田康雄、大磯町教委鈴木昇各氏の御教示を受け厚く感謝したい（44年1月15日）。

註

1. 「考古学の諸問題」（昭和39年）。「日本の考古学」所収『農具』（昭和41年）
2. 「日本民俗学会報」57
3. 戸刈義雄「稲作新説」（昭和25年）
4. 6. 米倉正直「これからの水稻直播栽培」県立農業試験場刊
5. 神奈川県穀物改良協会刊
7. 8. 10. 23. 緊急民俗調査、7～10筆者、23は宮田登氏調査。なお列挙した地名の最後の番号までが同一調査者によるものもの。
9. 17. 大塚巖徳氏報
12. 13. 14. 15. 20. 筆者調査
16. 「川崎市最西部総合民俗調査」中村克氏報（昭和43年）
18. 19. 大谷忠雄氏報。19は事例9と同じ。
21. 「遠藤民俗聞書」藤沢市教委刊
22. 相模民俗学会「民俗」8
24. 県立神奈川工業高校「郷土研究」9には、お祝いに用いるとある。
25. 「神奈川の民俗」（昭和43年）『鎌倉市十二所の年中行事』。事例4では田の神の祝いとしてニワトコを田の水口にさす。
26. 文部省（大正3年）
27. 28. 「折口信夫全集」「日本文学史ノート」「日本芸能史ノート」等参照
29. 炉辺叢書（大正15年）

「摘み田と田植」分布図



ツミ田，女の田植地帯は本文参照。
男の田植地帯の地名を記す。

- 横浜市戸塚区下倉田
- 藤沢市高倉
- 平塚市金田，真田
- 大磯町高麗，新宮，虫窟，小磯
- 海老名町北郷
- 愛川町中津，角田
- 津久井町鳥屋
- 相模湖町田んぼ沢
- 三浦市三戸